

(萩原慶の声でタイトルを読み上げる)

いっぽんせんとおおきなわっか

<I/O> (あいおー) のための断章

<映像>

黒い背景に白い文字でタイトルと右下に

詩 大崎清夏、朗読 萩原慶

<映像>

ビルの一室の様子。

コンクリート打ちっぱなしの壁に大きな窓が6つ。窓の外はうっすら明るい空。

床はフローリング。

正面の窓のそばに木枠が2つ吊ってある。

木枠には白く長い帯のような紙がwの文字のように垂れ下がっていて、

輪っかを二つ作り出している。

部屋いっぱいには撮影用の資材が広げられている。

<萩原の朗読>

IOはインプットのI

アウトプットのO

IOはいっぽんせんのI

おおきなわっかのO

<映像>

白く長い帯のような紙のなめらかな直線と曲線

<萩原の朗読>

IOはいまここのI

オリオン座の季節のO

<映像>

部屋の明かりが消えたりついたり

木枠に繋がった5つの電球が星の瞬きのように点滅している。

<萩原の朗読>

IOは色と音

いちにちの色

おごそかな音

<映像>

窓の外景色。

夜明け前の空の下、ビルが立ち並んでいる

高速道路と墨田川が並んでいる。

道路にはまばらに走る車のヘッドライト。

<萩原の朗読>

I/Oはインド洋。インドのI、オーシャンのO。

I/Oは1（イチ）と0（ゼロ）。いたずら好きの1と0。

<映像>

木枠の傍にベルリラ、という豎琴のような形の鉄琴が1つ置かれている。

窓に近い床に置かれた黒い毛ばたきに重りのようなものが付いていて、

突然、立ち上がってはすぐに倒れる

縦長の窓の外には青空が広がっていて、背の高い赤く紅葉した木が見える。

高速道路には車がひっきりなしに走っている。

<映像>

コンクリート打ちっぱなしの壁に大きな窓が6つ。フローリングの床。

今は、紙が垂れ下がり、電球が5つ繋がった2つの木枠とベルリラ1つと

正面の立て長の窓の前の床に重りがついた黒い毛ばたきが3つ置かれているのみ。

<萩原の朗読>

インド洋につながる

東京湾につながる

隅田川をのぞむ

浅草の遊歩道沿いに建つ

ビルの四階。十二月。

*

<映像>

部屋を捉えているカメラが引いていき、

正面の縦長の窓がさらに遠くなる。

<萩原の朗読>

ここからそこへ

あちらからこちらへ

遠くからもっと遠くへ

波が受け渡されてゆく。

音の波。光の波。水の波。

空気が震え 粒子が移ろう。

雲がうまれる。

*

<映像>

カメラは元の位置に戻り、部屋の右から左をゆっくりと映していく。

縦長の窓にスカイツリーの中腹、筋交いに組まれた鉄骨が現れ、また見えなくなる。

再び、カメラが引いていき、部屋全体が映し出される。

時折、首をもたげては倒れる毛ばたき。

<萩原の朗読>

いまこのI、オリオン座の季節のO。
がらんと広い、むきだしのコンクリート。
部屋に残る、むかし止んだ活動の気配。
部屋に満ちる、これから始まる活動の気配。
十二月の数日間、この部屋に私たちは滞在した。

*

ぶこつな白い手すりのついた縦長の大きな窓に、スカイツリーが切り取られていた。
空の木の根元には東京のビルが、どんぐりみたいにいちれつに並んで、手前を高速道路が横切っ
て、もっと低いところを川が横切って、川面はなみなみ動いているのに、水はどちらへ向かって
流れているのかわからない。

<映像>

日が落ちて、暗い室内。
暮れなずむ空の光が窓から差し込んでいるだけ。
映像は左から右へ移動していく。
窓辺の毛ばたきが立っては倒れ、せわしない雰囲気。
右側の木枠に繋がった電球が2つ、ぼんやり明かりを灯している。
再び、縦長の窓の向こうにスカイツリーの一部が現れる。

<萩原の朗読>

視界の左隅に、ひっそりと水を湛えた屋外プール。
あ、鳥。

<映像>

外の景色。
隅田川に沿って、同じような高さのビルが立ち並んでいる。
まどに明かりが灯っている。
隅田川と並行して高速道路があり、走行している車が水面に映っている。
川の手前に屋外プールがある
プールの水面にも木が映りこんでいる。

*

<映像>

夕方の光が満ちた部屋。
2つの木枠にはWの文字のように垂れ下がった紙の帯。

<萩原の朗読>

いっぽんせんのI、おおきなわっかのO。
部屋の中に浮かぶ二つの木枠。
木枠から垂れ下がる白い紙の輪っかに、波が届く。
音の波。光の波。
波うつ音。波うつ光。

<映像>

部屋を横から撮った映像。コンクリート打ちっぱなしの壁に縦長の窓が三つある。

カメラの視点が移動するとベルリラと繋がった方の木枠が映る。

垂れ下がった紙は起点から1つU字を描き、真ん中で一度木枠を通して今度は床まで届くほど長いU字を描いている。紙の幅は21センチ。

電球は5つとも灯っている。

もう1つの木枠の電球も5つとも明かりががついている。電球と木枠を繋ぐ5本のケーブルの曲線が交錯している。

窓からの光が紙の輪っかに影を作り出している。窓の手掛かりの金具や手すりの柵も映っている。

紙の輪っかを別の角度から見た映像。

長方形が縦に並んだように見え、横向きの太い影が縞模様になっている。

どこからかジリジリと音が聞こえてくる。

うーんというモーター音と共に紙の帯がゆっくりと下がり始める。

*

<萩原の朗読>

床に落ちた埃や屑が、白い紙の着地を待っている。

雲が地表に降りてくるのを待つように。

鉛筆がアイデアの浮かぶのを待つように。

レールに運ばれループを巡り床を擦って

白い紙に、私たちのまだ知らない言語が

書きこまれてゆく。

<映像>

ゆったりとした紙の曲線がゆっくりゆっくり床に迫っていき、

わずかに床に触れると、ふるふると揺れる。

さらにゆっくり横たわるように床につく。

*

<萩原の朗読>

基板とセンサー。

感受性のようなもの。

<映像>

白い壁に5つの黒い縦長の長方形の基盤がくっついている。

それぞれの白い光がチラチラとついたり、消えたりする。

それぞれの基盤は細いケーブルでできたベルトで繋がっている。

ベルトの一部、ケーブルがたわんで波になっている。

*

<萩原の朗読>

並んでまばたきする電球たち。

フィラメントのひそひそ話。

ふぞろいの光の点滅。

*

<映像>

暗い室内。

電球に焦点が当たっていて、後ろの窓と景色はぼやけている。

電球は丸いフォルムのガラスにフィラメントがはっきりと見えるレトロな雰囲気。

電球のガラス越しに見える窓の外の景色はにじんだように見える。

またジリジリと音が聞こえて、部屋の全体が映る。

電球がランダムに灯ったり、消えたりする

<萩原の朗読>

床の上 はしゃぐ 毛ばたきたち。

じゃれあいながら 転がって

犬の尻尾の 真似をしている。

*

<映像>

窓に近い床に、ソレノイドと呼ばれるモーターをつけた黒い毛ばたきが4つ置かれている。

前触れもなく、ぴよんと跳ね上がったたり、ぴんと立ったりしてはまた倒れて

そのたびにぼこぼこ音を立てる。

<萩原の朗読>

さえずる ベルリラ。

二進法の指に いたずらされて

すこし気の触れた かわいいはがね。

<映像>

ジリジリという音は木枠の横のベルリラがたてている

ベルリラのアップ。使い古された鉄の鍵盤の上いくつかの印がついている。

鍵盤の前に垂れ下がっている5つの振動モーター。

*

<萩原の朗読>

白い雲を送る 歯車。

寝ころぶ私の 左から右へ。

西の空から 東の空へ。

*

<映像>

銀色のプレートについた大きな歯車と小さな歯車がかみ合いながら回っていて、

プレートの背後からケーブルが伸びている。

<萩原の朗読>

向こう岸を散歩の人が歩いてゆく。こちら岸にはすこし褪せた常緑樹がひとりふたり、セーターのオレンジ色に染まった広葉樹がひとりふたり、その傍でずっと背の低い冬枯れの木々がもっと大勢、さむそうにしている。

朝日は、ビルとビルの隙間から、のぼってくる。

*

<映像>

外の景色。

朝の光が雲を照らすような空。

カメラが視点移動して、町を180度見渡すように映していく

ビルの一群、遠くに高さの違う2本の高速道路。

道路の奥に、整列するかのようにビルが立ち並んでいる。

手前には隅田川が流れている。

スカイツリーの筋交いも見えてくる。

<萩原の朗読>

インプットの1、アウトプットの0。

いちにちの色、おごそかな音。

いまここにある、オーケストラ。

1と0 1と0 1と0の、息づかい。

<映像>

窓から差し込む朝日。紙の帯に手すりの影を映している

夜明けの空。董色から薄いオレンジへのグラデーションを成している。

空を背景にビルが影絵のように浮かび上がっている。

その前を横切っていく高速道路を走る車。

ランダムに灯る電球の明かり。

部屋を見渡す映像。窓から差し込む光がダイヤモンドのような形の輝きを放つ。

《I/O》

インスタレーション：毛利悠子

詩：大崎清夏

映像：玄宇民

朗読：萩原慶

音響：藤口諒太

作品設計：nomena アトリエセツナ

会場：nomena

制作スタッフ：伊藤里織 敷根功士朗

設営：HIGURE 17-15 cas

英訳：近藤學

マネジメント：金島隆弘+藤原羽田合同会社